頭蓋外浸潤を認めた髄膜腫の猫の１例

○角田亜胡[1)]　堀　あい[2)]　三好健二郎[1,2)]　華園　究[1,2)]　柄本浩一[3)]　中出哲也[1,2)]
１）酪農大伴侶動物医療学　２）酪農大附属動物医療センター　３）えのもと動物病院

【はじめに】猫における頭蓋内腫瘍は、約70％が髄膜腫と報告されている。近年、これら頭蓋内腫瘍の評価は、獣医療でもヒト医療と同様にMRI検査が一般的となってきている。しかし、髄膜腫の診断は画像診断のみでは困難との報告もあり、依然として検討の必要性が求められる。今回我々は頭蓋外浸潤を認めた髄膜腫に遭遇したので、その概要を報告する。

【症例】雑種猫、６歳齢、去勢雄、体重2.6 kg。突然のふらつきと後弓反張を認め（第０病日）ホームドクターにて脳圧降下剤とステロイドにより加療、精査希望で酪農学園大学に紹介来院した。初診時（第18病日）、一般状態は元気食欲ありで意識状態は正常、自立起立・歩行は可能だが両後肢にふらつきを認めた。神経学的検査は右前肢の姿勢反応低下を認め、脊髄反射では両前後肢においてUMNであった。MRI検査を行った結果、鼻腔内後部から頭蓋腔頭側部を占拠する腫瘤性病変を認めた。拡散強調画像（DWI）では腫瘤実質に顕著な信号変化は認めなかった。また、重度の脳圧上昇に伴う小脳ヘルニアが示唆されたため、第20病日経前頭洞開頭術を行った。腫瘤は左前頭洞内に存在しており鼻腔内へも浸潤が認められた。翌日には自力採食が可能であり、ふらつきも軽減していたが、第22病日全般発作の重積を認めた。再度MRI検査を行ったところ、右側頭葉領域に液体貯留と重度の小脳ヘルニアを認めたため、外側テント前開頭術を行ったところ硬膜下に血腫を認めた。それら血腫を取り除き吸収性局所止血剤にて止血後閉頭した。抗てんかん薬を用いることで第25病日より発作は認められず、第26病日にはふらつきは残るものの自力歩行が可能となり神経学的検査上も改善が認められた。第31病日にはふらつきも更に軽減し、自宅での生活が可能となった。病理検査結果は髄膜腫であった。

【考察】本症例は、画像所見から鼻腔内腫瘍の頭蓋内浸潤も疑われたが髄膜腫と診断され、画像診断による診断の難しさが示された。しかしながらDWI所見に病理所見との整合性が認められ、DWIなどの特殊撮影が腫瘤鑑別の一助になることが期待された。また、大脳圧迫による小脳ヘルニアに対する迅速な外科的対応は、良好な予後に繋がる可能性が示唆された。一方、術後の管理においては、孤立性腫瘤摘出後に周囲空隙が存在する場合は、脳の再還流などにより脳頭蓋内出血を起こす可能性も考慮し管理すべきであると考えられた。